

〈ノート〉言語の創造性をめぐる一考察 ——特定の造語と文末表現の観察を通じて——*

杉村美奈

1. はじめに

言語の創造性は、言語学の入門書（O'Grady 2004、岸本 2009 など）において必ず取り上げられる、人間の言語を考察する上で欠かせない特徴の1つである。ノーム・チョムスキーの提唱する生成文法理論では、有限の要素（＝語）から無限の表現（＝文）を産出・理解する人間の言語能力の解明を研究課題の1つとしているが、本稿では、造語における語形成と役割語（金水 2003）と呼ばれる文末表現に着目し、言語の創造性と制限について考察する。具体的には、まず、外来語接辞を借用し形成された（と思われる）日本語の派生名詞や、新造語などの複合語に見られる語形成プロセスを観察する。次に、キャラ語尾（金水 2003）と呼ばれる文末表現に注目し、その創造性と統語的分布について考察する。ことばの創造性の裏に潜む規則体系を探ることにより、一見すると無秩序に構成されているかのように見える「創造的なことば」が、実は体系的に構築されていること（O'Grady 2004）を確認する。

2. 語のしくみ—派生と複合—

語形成を扱う形態論（morphology）では、語は「意味をもつ最小の単位」である形態素（morpheme）によって構成されると考えられている¹⁾。漆原（2016:2）の例に沿って、morphology と morpheme という語をそれぞれ形態素に分けると、前者は morph-(o)logy、後者は morph-eme となる。morph- はギリシア語由来の「形態」、-(o)logy は「学問」の意味をもつため、morph-ology は「形態に関する学問（形態論）」を指し、-eme は「素」という意味をもつことから、morph-eme は「形態素」を示すことになる。このように、接辞（affix）を基体（base）に付加して語を形成するプロセスを派生（derivation）と呼ぶ。

一方、任意の語と別の語を組み合わせることによって、新たな語を作り出すプロセスを複合（compounding）と呼び、複合により形成された語を複合語（compounds）と言う。複合語はさらに内心複合語（endocentric compounds）と外心複合語（exocentric compounds）に分けられる。内心複合語とは意味・範疇における中心的な役割、すなわち主要部をもつ複合語のことを言い、例えば、dogfood は food が主要部となり、食べ物の種類を表すもの（food for dogs：犬用の食べ物）であるため、内心複合語の例となる。一方、外心複合語とは主要部をもたない複合語のことを言い、例えば、pick pocket は pocket の種類を表すものでも pick という行為の種類を表すものでもなく、「スリ」という意味を持つことから、主要部をもたない外心複合語の例となる（竝木 1985:79）。

本稿では、これらの派生と複合という語形成に見られる創造性と制限を考察し、派生からは外来語の接辞を借用した（と見られる）派生名詞の例を、複合からは新造語における複合語の例を取り上げる。

3. 語形成に見られる創造性

3.1. 外来語の接辞を使用した語形成の例

田川 (2020) は、外来語の接尾辞として -(r)aa を取り上げ、-(r)aa がおそらく「～する人」を表す英語の接尾辞 -er (例: player, walker) からの借用であるという前提に基づき、安室奈美恵氏を模したファッションをする人という意味の「アムラー」、マヨネーズを好んで色々な食品に使う人を指す「マヨラー」など、外来語の接辞を用いた造語について論じている。桑本 (2003)、田川 (2020) は、接辞 -(r)aa が「アムラー」を発祥とすると推測しており、元々は amuro に -aa が付加されて形成された amur-aa から、r-aa が異分析 (reanalysis) により接辞として切り取られ、その結果、「マヨ-ラー」、「クチャ-ラー (くちゃくちゃ音を立てて食べる人)」（田川 2020: 31) などの語が出来たという仮説を立てている^{2,3)}。「ユニラー」(ユニクロの服を着る人) もユニクロの「ユニ」に -raa が付加して出来た語だとすると、桑本、田川の分析を支持する例と言えそうである⁴⁾。一方で、田川 (2020: 注 20) は、「シノラー」(篠原ともえ氏の様な服装をする人) の派生について、元の語である「しのはら」に /r/ 音が含まれることから、「シノ」と「ラー」という形態素分析が正しいと言えるかどうかは検討を要すると述べている⁵⁾。

また、田川 (2002) は、-er 系の別の接辞として、ウチナーヤマトグチにおける -(j)aa という接辞を取り上げており、「ゆくし (嘘)」を元の語として形成された「ゆくさー (嘘つき)」や、「暇する」を元の語とした「ひまさー (暇している人)」などを例に挙げ、-(j)aa の生産性の高さや接辞化における適用範囲の広さを指摘している (田川 2020: 32)。さらに、「言語学 -er」(言語学を勉強している人 / 好きな人) や「スタバ -er」(スターバックスが好きな人 / スターバックスによく行く人) といった書き言葉限定の派生接辞と見られる -er についても興味深い指摘をしている (田川 2020: 32-33)。

一方、英語の接辞 -er を用いた派生 (例: player, walker) と同様に生産性の高い日本語の派生名詞として、「ええかっこしー (格好つける人)」や「ナルシー (ナルシストな人)」などの例を村杉 (2014: 158) は挙げている⁶⁾。「ええかっこしー」は「ええかっこ」と「しい」(「する」の連用形「し」を名詞化し、2モーラの長さにしたもの) とが組み合わせられて出来た語と分析することもできるが、「ナルシー」は「ナルシスト」の省略系であることから、おそらく「ナル」と「シー」で構成されているとは言えないだろう^{7,8)}。英語には -ie という接辞を付加することにより、foodie (食べるのが好きな人) や Trekkie (スタートレックが好きな人) などの名詞を形成することができるが、これらの外来語が日本語においてそれほど定着していないことを考えると、「ナルシ」+ -ie の派生によって「ナルシー」が形成されたとは考えにくい⁹⁾。そもそも、「ナルシスト」自体に人を表す -ist という接辞が含まれる (例: pianist, biologist) ことや、「ナルシー」の意味が「ナルシズムが好きな人」ではないことから、この可能性は限りなく低いだろう。

一方、田川 (2020) は、和製外来語に使用される接尾辞として -ii (例: ポリユーミー (な)) を挙げており、-ii を英語の形容詞化接辞 -y (例: sleepy) からの借用である可能性を指摘している (田川 2020: 30)。もし、-ii が和製外来語の接辞であるとする、ここでの「ナルシー (な)」も英語の形容詞化接辞 -y の借用によって派生されたと考えることもできる¹⁰⁾。そうすると、「ナルシスト」あるいは「ナルシズム」から「ナルシ」部分を切り取った上で名詞化し、そこに -ii による接辞が付加することで「ナルシー (な)」が形成されたと考えることができるが、ここでの提案は推測

の域を出ない。いずれにせよ、「ナルシー」のような派生が英語の -er 系名詞と同様に生産性が高いと言えるかどうかは、さらなる検討が必要であると言える。

3.2. 新造語に見られる複合語の例

複合語には主要部をもつ内心複合語、主要部をもたない外心複合語という区分が存在することを2節で見た。複合語にはさらに音韻的な特徴として、連濁やアクセント位置によってひとつの語としてのまとまりを見せることが知られている(小松 1981、窪田 1995)。例えば、「ごみ+箱(はこ)」の後部要素である「はこ」の「は」が濁音になることによって、「ごみ**ば**こ」というひとつのまとまった語を形成し、「京都大学」(窪田 2019: 41)では、東京方言において元々「キョウト」の「キョ」にあったアクセントがなくなり、後部要素である「ダイガク」の「ダ」のみにアクセントが置かれ、1つのまとまった語としての「キョウト**ダ**イガク」を形成している。もっとも、後部要素の音韻構造によって複合語全体のアクセントは決定づけられる(窪田 1995)ため、例えば後部要素のモーラ数が1あるいは2モーラである場合には、「アメリカ**ジ**ン」のように前部要素の最後にアクセントが通常は置かれる(窪田 1995: 58)。ただし、後部要素が2モーラ以下の場合でも、例えば「サクラ」と「イロ¹」が組み合わせられた際に「サクライロ」となるように、後部要素が特定の形態素の場合に複合語全体が平板式のアクセントもつ場合もある(窪田 1995: 59)。

複合語アクセントは、上記のような複合語名詞のみでなく、「本読み」のような動詞由来複合語(deverbal compounds)にも見られる。伊藤・杉岡(2002)は、複合語のタイプによりアクセント位置及び連濁の有無に違いが見られることを指摘しており、例えば、「草取り(くさと^り)」のように、前部要素が後部要素の目的語に相当する場合には連濁が起こらず、アクセントが「くさと^り」となる。一方、「横取り(よこどり)」のように、前部要素と後部要素が修飾関係にある場合には、複合語全体のアクセントが平板化する。伊藤・杉岡(2002)は、この違いが後部要素の品詞の違いに起因すると主張しており、「草取り(くさと^り)」型複合語は後部要素の品詞が動詞であるのに対し、「横取り(よこどり)」型複合語の品詞は、後部要素の品詞が名詞であることから、動詞(連用形)としての「取り(と^り)」と名詞としての「取り(とり^り)」のアクセント規則にそれぞれ従うことを主張している(伊藤・杉岡 2002: 126)¹¹⁾。

この複合語による音韻的規則は新造語にも見られる。2022 ユーキャン新語・流行語大賞(「現代用語の基礎知識」選)にトップ10入りした「てまえど^り」は、コンビニなどの食品コーナーに陳列された商品を「手前から取る」ことを意味する複合語(手前+取り(とり))であるため、前部要素は後部要素の目的語ではなく、修飾語としての働きをしていると言える¹²⁾。したがって、この場合にも連濁が適用され、後部要素「とる」の「と」が濁音となっていることから、「てまえど^り」が「横取り」型の複合語と類似することがわかる。また、アクセントも「てまえど^り」と平板化することからも、同様のことが言える。また、「てまえど^り」は主要部が「とり」であり、取る動作を示すことから後部要素の品詞は動詞となる。ただし、「横取りする」と同様に「する」と共起し「?てまえど^りする」のような表現が可能かどうかは検討の余地がある。確かに Web 検索をすると、「?てまえど^りする」という表現は多数見つかるのだが、「?てまえど^りするのはやめましょう」や「?てまえど^りしてください」など、目的語が非顕在的な文に比べ、「??プリンをてまえど^りする」のように目的語が顕在化すると容認度が下がる。この点において、「手柄を横取りする」、「財産を

「横取りする」のような VN 型 (verbal noun) 名詞の「横取り」(伊藤・杉岡 2002) とは異なり、「てまえどりを心がけましょう」などの例に見られるように、「てまえどり」は複合名詞としての振る舞いを見せることの方が多く印象を受ける¹³⁾。一方で、目的語を除いた「てまえどりする」という表現自体が可能な話者にとっては、「てまえどり」が VN (verbal noun) 型動名詞として機能しているのかもしれない¹⁴⁾。この場合は、複合語の意味としても、「取る」動作の種類(手前からとる)を表す内心複合語の例となるだろう。

しかし、伊藤・杉岡(2002)は、「草取り型」複合語は生産性が高く、造語(例:スプーン曲げ、ナンバー隠し(伊藤・杉岡 2002:130))も見られるのに対し、「横取り型」複合語は生産性が低いことを指摘している(例:#車運び(車で運ぶ)、#早喋り(早く喋る)(伊藤・杉岡 2002:131))。伊藤・杉岡(2002:131)は、「ななめ聴き」、「座り読み」のような造語が一部見られるのは、これらの造語が「修飾語+動詞」から形成される複合語ではなく、類推(analogy)から形成される造語であることに起因するとしており、ここでの類推とは、既存の語の一部を切り取って新しい表現を作り出すことを意味する。この分析に従うと、「てまえどり」は「横取り」からの類推で出来た造語とも言えるだろう。実際に、Web 検索をすると「奥どり(奥の方からとる)」という造語が複数見つかることから、今後「てまえどり」の類推から造語が形成されることが想像できる。

このような観点から新造語を考察すると、一見、自由に形成されたように見える語も、一定の規則に従っている事実が窺える。

4. 語形成に見られる創造性の中の制限

単に同じ単語が無秩序に繰り返されただけのように見える文が、実際には階層性をもつ立派な文である(Pinker 1994)ことを示す例として、(1)の「バッファロー文」がよく取り上げられる。

(1) Buffalo buffalo Buffalo buffalo buffalo buffalo Buffalo buffalo.

(Pinker 1994:208、作例は Annie Senghas による)

(1)の文における「バッファロー」には3つ意味があり、1つが「アメリカバイソン」を意味する buffalo、1つがニューヨーク州のバッファローを指す、地名の Buffalo、そして、もう1つが「脅かす」と言う意味の動詞としての buffalo である。この情報をもとに(1)の文の意味を考えると、(2)のようになる(Pinker 1994)。

(2) バッファロー出身のバッファロー (Buffalo buffalo) が脅かしている (別の) バッファロー出身のバッファロー (Buffalo buffalo) が、(さらに別の) バッファロー出身のバッファローを脅かしている。

この文はさらに長くすることもできる(例: Buffalo buffalo)。このような文を可能にしているのは、(i) buffalo という語が名詞にも動詞にもなること、(ii) buffalo が複数形の名詞としても用いられることにより複数形の屈折接辞が名詞

に現れず、同時に時制接辞も動詞に現れないこと、さらに、(iii) バッファローという語が Buffalo という地名にもなっていること、(iv) 修飾節の補文標識 (complementizer) である *that* が省略できること、などであると言える¹⁵⁾。

上記の buffalo の例のように、接辞を付加することなく品詞を変換する派生プロセスを、転換 (conversion) と呼ぶが、英語では、(3a-c) や (4a-c) に提示されるように、名詞から動詞への転換は数多く見られ、かつ、創造的であることが知られている。

- (3) a. pull the boat onto the *beach* → *beach* the boat
 b. put the wine in *bottles* → *bottle* the wine
 c. clean the floor with a *mop* → *mop* the floor

(O'Grady 2004 : 3)

- (4) a. We Greyhounded to Toronto. (Greyhound is a bus service across US and Canada)
 b. We'll have to Ajax the sink. (Ajax is a cleanser)

(O'Grady 2004 : 10 Exercise 1 の例に説明を加えたもの。Clark & Clark 1979 : 783, 802)

(3a-c) は、名詞である *beach*, *bottle*, *mop* が転換により動詞となっている例である。(4a) では、北米のバス会社を指す *Greyhound* という名詞を動詞にすることにより、「Grayhound バスでトロントまで行った」という文を形成している。(4b) では、洗剤の商品名である *Ajax* が動詞として使われており、「シンクを *Ajax* で掃除した」という意味になる。

(3a-c) や (4a, b) の例が示すように、一見すると転換は非常に生産的なプロセスであるように見えるが、実際には一定の制限を受けることが指摘されている (Clark & Clark 1979, O'Grady 2014)。例えば、*jail* という名詞は動詞にもなることができるが (例 : *jail the robber*)、*prison* という名詞は動詞として用いることができない (例 : **prison the robber*) (O'Grady 2014 : 3)。O'Grady は、英語には **prison the robber* が意図する内容を表す動詞として、既に *imprison* という語があるため、*prison* という名詞由来動詞が形成されないことを指摘している。これは Aronoff (1976) による阻止 (blocking) 現象の一種であると言える。また、*summer* や *winter* など、時の表現を動詞にも用いることができる一方で (例 : *We summered in Paris*)、*midnight* や *noon* などの表現は動詞にならないことも指摘されている (例 : **Andrea nooned at the restaurant*) (Clark & Clark 1979 : 773)¹⁶⁾。Clark & Clark (1979) では、時の表現から動詞を派生する際には、一定の時間の幅を示す表現である必要があることが指摘されており、したがって、*midnight* や *noon* など、時間軸の上で、特定の一点を表す表現から派生した動詞は作れないことになる。このように、ごく一部の名詞由来動詞の生産性を考察しても、創造性の中には制限があることが見て取れる。

上記の例では、語形成を制限する要因として、同じ意味内容を表す別の語がすでに存在しているという語彙的な理由や、意味的な制限のみについて考察しているが、語形成には音韻的な制約も課されることを指摘しておく。例えば、O'Grady (2014 : 4) では、英語における架空の語として *flib* や *traf* は (英語という言語の) 音韻構造上、形成可能であるが、同じ音の組み合わせから成る、**bffi* や **ftra* は形成不可能であることが指摘されている。これらの語は、同じ音で形成されているにも

かわらず、*bf や *ft は英語において許容される子音の組み合わせではないため、排除される。

ここで、創造性の中の制限という観点から、3節で見た日本語における語形成について再度考察してみると、例えば、-(r)aa という接辞を用いた「マヨラー」は形成できても「#マヨネーズラー」は不自然な語形成のように思える（「ケチャラー」、「#ケチャップラー」の対比にも同様のことが言える）。-(r)aa が名詞の一部に付加できることは、3.1節の田川（2020）の例で既に考察してきたが、「#マヨネーズラー」の例からは、名詞の「一部」に-(r)aa が付いて、短縮語として機能するというのが重要な特徴であるように思える。例えば、「砂糖を好んで使う人」と言う意味での「シュガラー」はおそらく可能な語形成であるが、「#シュガーラー」は不自然な語形成であるため、短縮語の語幹として（一部の例外を除き）2モーラを基本とする（窪田 2002: 108）という、ある種の音韻的な制約が-(r)aa の接辞化には観察される¹⁷⁾。一方で、同じ意味を持つ動詞として「#砂糖（さとう）ラー」や「#さとラー」は、おそらく形成されないことを考えると、-(r)aa の付加先である名詞に、ある種の語種制約のようなものも同時に働いているように見える¹⁸⁾。もし、そうであれば、田川（2020）が示唆する、英語 -er 由来接辞の生産性および語種の研究に新たな洞察を加えることができるかもしれない。また、3.1節で考察した「ユニラー（ユニクロを好んで良く着る人）」には、「ユニクラー」という変異形が観察されることも興味深い事実である¹⁹⁾。一方、「#ユニクロラー」という変異形は確認されていないことから、ここでも-(r)aa の接辞化における音韻的な制限が確認できる。「ユニクラー」の形成は、田川（2020）による「アムラー」派生の分析（amur-aa）と同様に、子音 /r/ の音で終わる語には、異形態としての -aa が挿入されると考えられる。つまり、「ユニラー」、「ユニクラー」という2種類の語形成プロセスからも、桑本（2003）、田川（2020）による「異分析としての-(r)aa接辞」が支持されると言える。

以上、語形成に関わる創造性と制限について考察してきた。次節では、観察の対象を文レベルに広げ、文末表現に見られる創造性と制限について考察する。

5. キャラ語尾にみられる創造性

本節では役割語（金水 2003）と呼ばれる文末表現の創造性について考察する。金水（2003: 205）は、役割語を「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示させると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」と定義づけており、例えば、漫画の世界において「博士語」として「わし」という一人称や「～じゃ」という文末表現が使われがちなことや、「お嬢様語」として「～てよ」（例：「よろしくてよ」）などの文末表現が用いられることなどを役割語の指標として例にあげている。定延（2007）は、役割語の中でも「特定のキャラクターに与えられた語尾」としての「キャラ語尾」（金水 2003: 188）に特に注目し、その統語的分布から、「キャラ語尾」が「だ」・「です」等のコピュラの変異体としての「キャラコピュラ」（例：「じゃ」、「でござる」）と、コピュラ位置から逸脱した場所に現れ、「文末らしい文末（定延 2007: 44）」に現れる「キャラ助詞」（例：「おう」、「ぴょーん」）に分類されると提案している²⁰⁾。定延・張（2007）においては、「ワン」や「ニャン」といった動物の鳴き声を由来とし、特定の動物を想起させるものも「キャラ

助詞」に分類している²¹⁾。

定延(2007)は、キャラ助詞が終助詞(「よ」、「か」、「ね」)の後に生起することを観察しており(例:「[...] どうなるのかぴょーん」(定延 2007: 35))、秋月(2012)でも、「ニャン」など動物を想起させるキャラ語尾が終助詞の後に現れる例が確認できる(例:「[...] お肌に悪いわニャン」(秋月 2012: 48))。一方で、秋月(2012)、Dohi(2021)は、これらの文末表現が終助詞の前に現れる例を取り上げ、キャラ語尾の統語的分布に揺れが生じることを指摘している。事実、定延では、「[...] うそだよぴょーん」(定延 2007: 35)などの例も挙げているが、「うそだぴょーん」のように、「ぴょーん」が終助詞の位置に現れる場合もあり、終助詞との共起可能性に関しては、容認性判断に揺れが生じる。「ワン」のような役割語に関しても、「お腹がすいたワンよ」は容認可能なのに対し、「#お腹がすいたよワン」は容認度が下がる。疑問文でも同じことが観察され、「お腹すいたワン?」や「お腹すいたワンか?」は容認可能だが、「#お腹すいたかワン?」は容認度が下がる^{22,23)}。秋月(2012)、Dohi(2021)は、キャラ語尾と終助詞の位置関係の違いによって生じ得る、文の容認性判断の揺れについては言及していないものの、一部のキャラ語尾が終助詞の前に生起する事実を指摘している²⁴⁾。いずれにせよ、キャラ語尾には統語的な生起位置について、ある種の制限が課されることは確かである。本節では、キャラ語尾が生起可能な位置の言及に留めることとするが、上述の例のように、終助詞の前にキャラ語尾が現れる事実がある一方で、終助詞の後に現れるキャラ語尾を容認する話者が一定数いることも事実であり(秋月 2012、Dohi 2021)、文末表現としてのキャラ助詞の統語的分布および範疇の区分に関しては、さらに検討が必要であると言える。

最後に、最近の漫画の世界におけるキャラ語尾の例を紹介して、言語の創造性をめぐる考察の締めくくりとしたい。特定の話し手を想起させる文末表現にはかなりの多様性があることから想像できるように、「ワン」や「ニャン」と言った「動物キャラ語尾」(秋月 2012)にも創造的な例が観察される。(5)は、ニワトリのキャラクター「コケピー」(藤本タツキ作『チェンソーマン』第12巻)の発話に見られる、動物キャラ語尾の例である。

(5)「ボクの名前はコケピーだコケ!みんなと友達になりたいコケよー!」²⁵⁾

(藤本タツキ「チェンソーマン」第12巻, 東京: 集英社, p.1)

1文目の「ボクの名前はコケピーだコケ!」における文末表現の「コケ!」は、定延・張(2007)の分類に従えば、ニワトリの鳴き声のオノマトペをもとにした「キャラ助詞」に分類されるだろう。しかし、2文目の「みんなと友達になりたいコケよー!」の「コケ!」は、終助詞「よ」の前に現れることから、上述の「お腹がすいたワンよ」の「ワン」と同じ分布を見せることに注目されたい。(5)の発話は、定延(2007)の分類でいうところのキャラ助詞としての「コケ!」と、秋月(2012)、Dohi(2021)の指摘する、終助詞の前に現れる「コケ!」が同時に現れている、貴重な例であると言えよう。

本節で概観したキャラ語尾の研究は、単に言語の創造性と言った側面だけでなく、役割語間の統語的分布や機能の違いといった研究に重要な示唆を与える。例えばDohi(2021)は、統語論と談話構造のインターフェース研究の一環として役割語の分析を提示している。具体的には、Dohi(2021)は、キャラ語尾の生起環境を話し手と聴き手の間の一致現象(agreement)と捉え、話し手の性別を

想起させる「わ」や「ぜ」などの文末表現と、本節で考察したキャラ語尾とは、統語的認可のメカニズムが異なることを提案している。役割語の生起環境に一致現象が関与しているという可能性は、今後の統語論・語用論インターフェース研究の発展に重要な示唆を与えるだろう。

6. おわりに

本稿では、語レベル・文レベルにおける人間言語の創造性と制限について考察した。具体的には、外来語接辞の借用により形成された日本語の派生名詞や、新造語としての複合語を取り上げ、その語形成の裏に潜む規則性と制限について概観した。また、キャラ語尾と呼ばれる文末表現にも注目し、その分類と統語的分布を観察した。

語形成と意味との関係及び音韻的制限、また、生成文法研究では普段扱われることのない役割語の生起位置といった本稿での考察が、今後の学際的な言語研究の1つのきっかけとなることを期待する。

注

- * 本稿執筆にあたり有益な情報及び指摘をいただいた、足立英樹氏、Stephan Hurtubise 氏、久屋愛実氏、Moti Lieberman 氏、大川淳氏、佐野愛子氏、田上香奈氏、田上七彩氏に深く感謝申し上げますとともに、英文要旨の校正に関して Moti Lieberman 氏に謝意を表したい。言うまでもなく、本稿における誤りは全て執筆者の責任である。
- 1) 本稿で扱う形態論における用語やその定義、形態論の理論的変遷の概観については、漆原 (2016)、西山・長野 (2020) 等を参照されたい。
 - 2) 異分析 (metanalysis) とは、斎藤・田口・西村 (編) (2015: 99) の定義によると、「類推により本来とは異なる箇所に形態素境界が意識されて語形が変化すること」を言う。
 - 3) 桑本 (2003) は「アムラー」、「マヨラー」などの「ラー」を「シャネラー」「プラダー」からの類推によって形成された可能性を指摘している。
 - 4) 「ユニラー」の例は佐野愛子氏および足立英樹氏の指摘に依拠する。
 - 5) 実際に「ユニラー」も同様に元の語に /r/ が含まれていることを考えると、「ラー」接辞を支持する例であるかどうかはさらなる検討が必要である。この点に関しては、4 節で再び言及する。
 - 6) 村杉 (2014) はこれらの例を若者言葉の 1 例として紹介しているが、「ええかっこしい」や「いらんことしい」は関西方言の表現として知られている。また、村杉は「かっこつけしー」という用例も挙げていることから、この例でも「しい」が独立して接辞化していることが窺える (「ええかっこする」vs. *「かっこつけする」)。
 - 7) 「し」を 2 モーラの長さにするのは、関西方言では、1 モーラの語が最適ではないとされることが原因であると考えられる。語のモーラ制限については、窪田 (2002: 96) を参照されたい。
 - 8) Wikipedia「近畿方言」の項目 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%91%E7%95%BF%E6%96%B9%E8%A8%80> 2022 年 12 月 3 日確認) では、『しい』は『する』の連用形名詞化」とされており、意味は「～しがちな人」、「～してばかりの人」と定義されている。具体例として、「ええかっこしい」の他に「いらんことしい (いらんことをする人)」、「真似しい (真似をする人)」が挙げられている。
 - 9) Trekkie の例示は Stephan Hurtubise 氏による。
 - 10) この可能性は佐野愛子氏との議論から派生したものである。
 - 11) これら 2 タイプの動詞由来複合語の音韻的特徴を分散形態論の枠組みで、統語構造における項の具現化の違いという観点から説明を試みる、長谷川・大関 (2020) も参照のこと。
 - 12) 2022 ユーキャン新語・流行語大賞 (「現代用語の基礎知識」選) <https://www.jiyu.co.jp/singo/>
 - 13) 「てまえどり」という語が、その行為を推奨する文脈で名詞として使用されることが多い点については、田上七彩氏の指摘による。
 - 14) 目的語を伴わない「てまえどりする」の容認度が若干上がる理由の背景として、「てまえどり」が VN 型複合語として機能しているのではなく、名詞としての「てまえどり」に付随する「を」を単に省略しただけの可能性も考えられる (「てまえどり (を) する」)。つまり、伊藤・杉岡 (2002: 112) による、「(*) 野球する」とい

- う口語表現が許容される場合には、「を」格が省略されていることが理由であるとする現象と同じなのかもしれない。この可能性は大川淳氏との議論から派生したものである。
- 15) 堀田隆一氏による「hellog ~英語史ブログ #264」にバッファロー文における転換についての詳しい記述がある。<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2010-01-16-1.html>
 - 16) ここでの例は全て O'Grady (2014: 3) からの抜粋である。O'Grady (2014) の議論は Clark & Clark (1979) を基に展開されており、Clark & Clark はこれらの創造的な名詞由来動詞の使用は、話し手と聞き手の間の共通認識という 'convention' に拠ると主張している。
 - 17) この可能性は、久屋愛実氏との議論から派生したものである。
 - 18) 「さとラー」の容認性には、揺れが見られる。容認不可能であると判断する話者に関しては、「悟る人」の意味での「悟ラー（さとラー）」との語彙的ブロック（Aronoff 1976）が起きている可能性もあり、そのようなブロック効果が見られない話者は「さとラー」を容認するのもかもしれない（久屋愛実氏の指摘による）。また、-(r)aa 接辞による派生は、名詞が「コピー」、「メモる」のような「～る」動詞の派生を許すものに限られるという可能性もあり、「#シュガーラー」や「#砂糖（さとう）ラー」は「#シュガーる」、「#砂糖（さとう）る」が言えないことから説明ができるかもしれない（同じく、久屋愛実氏の指摘による）。なお、「～る」動詞には、基本として2モーラの語幹を残すという独立した制約がある（窪菌 2002）ことから、この可能性に関しても、音韻的な制約による説明が可能である。
 - 19) 「ユニクラー」の例は、足立英樹氏の指摘による。
 - 20) 定延・張（2007）では、さらに「キャラ終助詞」（例：SNS などの文末において、終助詞「よ」の位置に現れる「お」という下位分類があることを提案している。
 - 21) 定延（2007）自身も、「ワン」や「ニャン」のような、動物の鳴き声のオノマトペから派生したと思われる文末要素について言及しており、断定はしていないものの、「キャラ助詞」と分類されることを示唆している（定延 2007: 45）。
 - 22) 「お腹すいたのかな？」のような疑問文における、終助詞「な」に相当する機能として「な」を「ワン」に置換している話者にとっては、「お腹すいたかワン？」は容認されるようである。この場合は、「ワン」は注 20) で述べた、定延・張（2007）の「キャラ終助詞」として機能しているのかもしれない。
 - 23) Dohi (2021) でも、「クボ」というキャラ語尾（ビデオゲーム『Final Fantasy』シリーズ中の登場キャラクター、モーグリを表す役割語）が疑問文において、文末の「か」の前に現れることについて言及しており、その生起位置から、キャラ語尾と丁寧表現の「ます」との類似性を指摘している。
 - 24) Dohi (2021) は、キャラ助詞の統語的分布の揺れの背後には、音韻的な理由があるのかもしれないと推測している。一方、秋月（2012）は、キャラ助詞の統語的分布の揺れの背後には、文法化（grammaticalization）が関与していることを提案しており、「文法機能を持たない、オノマトペ」、「助詞」、「終助詞」の順に文法化が進むと主張している。秋月によると、一部のキャラ助詞が、文法化によって終助詞として機能していることから分布の揺れが見られるということであるが、統語的分布の揺れに文法化のプロセスが関与しているかについては定かではないため、ここではこの問題には立ち入らないでおく。
 - 25) この例は足立英樹氏の指摘による。

参考文献

- 秋月高太郎. 2012. 「動物キャラクターの言語学」. 『尚絅学院大学紀要』 64, 43-57. 尚絅学院大学.
- Aronoff, Mark. 1976. *Word formation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Clark, Eve V. & Herbert H. Clark. 1979. When nouns surface as verbs. *Language* 55. 767-811.
- Dohi, Atsuhiko. 2021. A formal approach to role language: sentence-final particles and the speaker-hearer link. *Journal of Japanese Linguistics* 37. 203-227.
- 長谷川拓也・大関洋平. 2020. 「分散形態論と日本語の動詞由来複合語」. 日本言語学会第 161 回大会口頭発表資料.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』. 東京：研究社.
- 金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 東京：岩波書店.
- 岸本秀樹. 2009. 『ベーシック生成文法』. 東京：ひつじ書房.
- 小松英雄. 1981. 『日本語の音韻』. 東京：中央公論社.
- 窪菌晴夫. 1995. 『語形成と音韻構造』. 東京：くろしお出版.
- 窪菌晴夫. 2002. 『新語はこうして作られる』. 東京：岩波書店.
- 窪菌晴夫. 2019. 『よくわかる言語学』. 京都：ミネルヴァ書房.
- 桑本裕二. 2003. 「若者ことばの形態論のおよび意味論的考察にもとづく諸特徴について」. 『東北大学言語学論集』

12. 65-78. 東北大学言語学研究会.
 村杉恵子. 2014. 『ことばとところ—入門 心理言語学』. 東京: テコム.
 竝木崇泰. 1985. 『語形成』. 大修館書店.
 西山國雄・長野明子. 2020. 『形態論とレキシコン』. 東京: 開拓社.
 O'Grady, William. 2004. Language: A preview. In William O' Grady & John Archibald (eds.), *Contemporary linguistic analysis: An introduction (5th edn.)*, 1-11. Toronto: Pearson Longman.
 Pinker, Steven. 1994. *The language instinct: How the mind creates language*. Penguin Books.
 定延利之. 2007. 「キャラ助詞が現れる環境」. 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』, 27-48. 東京: くろしお出版.
 定延利之・張麗娜. 2007. 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」. 猿飛 (編) 『日中対照言語学研究論文集: 中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴』, 99-119. 大阪: 和泉書院.
 斎藤純男・田口喜久・西村義樹 (編). 2015. 『明解言語学辞典』. 東京: 三省堂.
 田川拓海. 2020. 「<パネルディスカッション「借用語と日本社会」> 外来語の形態論研究: 外来語系接辞と新語形成」. 『日本語と日本文学』 66. 25-38. 筑波大学日本語日本文学会.
 漆原郎子. 2016. 「文法における形態論の位置づけ」. 漆原郎子 (編) 『形態論』, 1-26. 東京: 朝倉書店.

用例出典

2022 ユーキャン新語・流行語大賞 (「現代用語の基礎知識」選) <https://www.jiyu.co.jp/singo/>
 「チェンソーマン」第12巻. 藤本タツキ. 2022. 東京: 集英社.

(本学文学部准教授)

Notes on Creativity in Language: Innovative Word-Formation and Sentence-Final Elements

by

Mina Sugimura

Creativity is one of the intriguing yet fundamental aspects of human language. This squib takes up some of the innovative word-formation processes and sentence-final functional elements called ‘role language’ (Kinsui 2003), a style of speech one can easily associate with a specific person or character. Innovative word-formation is explored in derived nouns with the seemingly borrowed suffix *-er* from English, realized as *-(r)aa* (Tagawa 2020), and also in newly-formed compounds from 2022. For role language, the squib focuses on a particular set of sentence-ending particles created with the onomatopes (Sadanobu 2007 a.o.), examining their distributions in relation to other particles in a sentence. Through observation on these innovative examples, it is pointed out that creativity is guaranteed under the umbrella of systematic constraints (O’Grady 2004), and therefore our innovative words and sentences are not freely formed without any restrictions. In short, examining creativity of language in fact leads us to finding (ir)regularity of language. Although role language is rarely discussed in the framework of theoretical linguistics such as Generative Grammar (Dohi 2021), it has the potential to become an interdisciplinary research topic, which can add another important aspect to our knowledge of language.